

## 吐蕃による吐谷渾支配とガル氏

旗手 瞳

チベット高原から台頭した吐蕃は、青海地域にあった吐谷渾を670年に征服し、9世紀中葉まで支配下に置いた。この論文で筆者は、7世紀後半の吐蕃において独占的な権力を振るったガル氏に注目し、

①ガル氏が吐谷渾支配にどう関わったか

②吐蕃は征服した吐谷渾に、どういう政策を展開したか

③ガル氏粛清事件（698年）は吐谷渾支配にどう影響したか

を分析した。その結論は、以下の通りである。

①ガル・トンツェンは659年から666年まで、吐谷渾遠征の総司令官を務めた。667年に彼が死去した後、占領した吐谷渾の地における軍事活動は、息子のガル・チンリンとガル・ツェンワらが指揮した。

②吐蕃は征服後の吐谷渾に、吐谷渾王を擁立した。その一方、唐へ侵攻する橋頭堡として、吐谷渾を最大限に活用するため、積極的な経略に乗り出した。これらの政策の実施において、軍事活動と同じくガル氏が指導的立場を果たしたと考えられる。

③698年に発生したガル氏粛清事件によって、事実上、吐谷渾経略を担ってきたガル氏は徹底的に排除された。さらに事件を契機に、大規模な吐谷渾人の離反が発生した。その結果、吐蕃による吐谷渾支配はこの時、大きな危機を迎えたと考えられる。

ガル氏粛清後、吐蕃中央ではガル氏にかわり、ド氏・バー氏・チョクロ氏らが新たに政権中枢を占めた。706～714年、彼らはほぼ毎年、吐谷渾に自身の氏族出身の大臣を派遣し、また吐谷渾王とチョクロ氏の娘とを結婚させた。これらの行動を通じて、吐谷渾との信頼関係の回復につとめたと考えられる。その結果、714年頃には、吐蕃は再び吐谷渾を前線基地として、唐に大規模な侵攻を行うことが可能となった。